岩手県遠野市（とおのし）

認知症ケアを視覚的に体験するツール

当事者の気持ちを知ることが共生社会への出発点となる。

■人口
23,610人
■世帯数
10,364世帯
令和7年4月30日時点

認知症になっても安心して暮らせる地域づくりには、認知症への正しい理解の浸透が欠かせない。遠野市では、当事者と介護者、双方の視点を疑似体験できるVRツールを活用。住民に向けた認知症ケアの啓発に幅広く取り組んでいるという。

従来の講話スタイルによる学習会では認知症を理解する上で限界があった。

同市では、認知症サポーター養成講座を中心に、正しい理解の普及に努めてきた。しかし地域には、“認知症になったら終わり”“家族の中にいたら外には出せない”といった声が根強く残っていたという。国が掲げる“新しい認知症観”は、周囲の支援や理解があれば、当事者も地域で自分らしく暮らせるという考えに立っている。しかし、「そういった理念が住民に浸透しているとは言い難く、認知機能が低下すると家に引きこもる人が多いのが現状です」と川原さん。また、市の在宅介護実態調査では、認知症を抱える人への食事介助やトイレ誘導など、日常的な対応に介護者が苦労している実情が明らかになった。「養成講座の受講者は順調に増えていますが、講話スタイルによる学習会だけでは、認知症の理解や向き合い方、適切なケアの習得には限界があると感じていました」。

そうした中で出合ったのが、「大塚製薬」の「認知症ケア支援VR」だったという。これは、当事者と介護者双方の視点を体験できる啓発ツールだ。VRでは、物を盗まれたと訴えたり、外出を強く拒否したりといった、認知症のよくある場面が再現される。介護者である家族の言動に対して、当事者がどのような気持ちになるのか。それを知ることで、正しい理解へ近づけるという。

双方の視点から感情を疑似体験し適切な向き合い方を学んでいく。

導入したツールを体験した川原さんは、不思議な感覚だったと振り返る。「VRでは、介護者の言動に対する、当事者の“心の声”を聞くことができます。そうすると、今までは周囲が戸惑っていた行動も、“確かにこんな言い方をされたらそうなるだろうな”とすんなり理解できる。さらに動画では、そのとき介護者がどう感じていたか、どういう対応をすればよかったかまで解説してくれます。双方の視点を体感できるというのが、まさに体験型学習のメリットですね」。

このVRは、認知行動学や介護の研究者など、専門家の監修のもとにつくられている。動画の中では、医師が当事者・介護者の行動や気持ちを解説してくれるため、学習会に専門家を招いたり、職員が講話をしたりする負担をなくせるのもポイントだ。「ボタンを押したら再生できるなど、操作も簡単です。また、通常はゴーグルを装着して体験しますが、プロジェクターに映すことで、大人数での学習会にも活用できる。場所や人数に縛られないため運用の幅は広がりそうです」。

認知症の人もそうでない人も、ともに活動できる地域をつくる。

令和7年4月には、過去に養成講座を受講した地域団体を対象に、ステップアップ講座としてVR体験を実施。参加者の反応は上々だったという。従来の講座でも、講師の川原さんが当事者の気持ちを代弁し、適切なケアを伝えてきた。しかし、「話を聞くのとVRで体験するのとでは、理解の深さが違います。これまでは“分かっているけど実行できない”という感想が多かったのですが、VRを体験した後は“こういう気持ちになるのなら、声かけの仕方を穏やかにする必要がありますね”と言われるようになりました」。介護者視点から当事者視点へ、意識が転換する様子が見られたそうだ。また、評判を聞いた他団体から、開催要望が相次いでいるという。

65歳以上の5人に1人が認知症になるとされ、誰もが支える側・支えられる側になり得る時代。同市では、地域団体に加え、企業や学校など幅広い層に養成講座の受講を働きかけている。「正しい理解があれば、みんなで見守り、支えていくことができます。認知症になったからといって家に閉じこもらず、安心して地域の集まりなどに参加してもらいたい。“認知症になっても心配しないで”と言える地域が理想です」。相手の視点を体感できるVRツールは、そんな理想の未来を築く一助となるのではないだろうか。

INTERVIEW

遠野市
健康福祉部
健康長寿課 保健師
川原（かわはら） 恭一（きょういち）さん

自治体担当者の悩み

認知症当事者の気持ちを代弁するのが難しい

講座内容がマンネリ化してきた

認知症ケア支援VRとは

VRゴーグルを装着して認知症ケアを学ぶことができるツール。

体験を通じて変わる介護者のまなざし

▲左は介護者視点、右は当事者視点。両者の困り事が再現される。

体験ステップ

① 受講者にVRゴーグルを装着してもらう
② タブレットから場面を選び、再生ボタンを押すだけ！

※このシステムは医療機器ではありません。コミュニケーショントレーニングを目的とするVRを用いた支援プログラムです。

講話にはない心の体験

VRゴーグルでの視聴は、視界が限定されることで、その場にいるかのような没入感が特徴。当事者の感情に集中しやすいという。

場面を自由に選択可能

“物取られ妄想”をはじめとした、認知症のよくある場面を体験できる。動画は1本当たり15分程度の構成で、3カ月ごとに新たな場面が追加される。

認知症との共生に向けた学びの機会

遠野市の導入事例

令和6年度に3台購入し、令和7年度はさらに3台追加。研修やイベントなどで繰り返し活用している。
※認知症総合支援事業費から調達（令和7年度の予算）

●認知症サポーターステップアップ講座

同市では、「これからの時代は、誰もが“支える側”“支えられる側”」をテーマに、VR体験を取り入れた講座を実施している。

●小学校での体験講座

今後は、小学生向けに体験講座を実施。地域との関わりを深めながら、認知症の人との共生社会の実現や、見守り活動の活性化を目指している。

そのほか、スーパー・銀行・郵便局など、地域に根ざした企業にも働きかけ、研修を広げていく方針だ。

CHECK!

適切な接し方を学ぶコンテンツ

認知症の人と接する上で戸惑いやすい場面を再現し、対応を学べる内容を多数用意。今後も動画は追加予定で、研修の目的に応じて選択できる。

初期費用がかからない短期利用プラン

認知症啓発イベントや専門職の研修などに活用でき、1カ月の短期プランも用意。導入のトライアルとして試してみては。

※写真はイメージです

FD2506003　2025年6月作成

お問い合わせ　PR
cs_faceduo@otsuka.jp
大塚製薬株式会社
東京都港区港南2-16-4
品川グランドセントラルタワー

お問い合わせ・詳細はこちら▶

© 2025 ジチタイワークス